肥後守が消え、切出しナイフが消え、はさみが遠ざかっていく。子供たちの世界の中から、物を切るというひとつの文化が締め出された時、子供たちはどこへ行ってしまうのか？

》切れない刃物のデメリット《

幼稚園・小学校で、次第に刃物と名のつくものが消えつつある。園児・児童が幼稚園や小学校でケガをすれば、保母さんや先生の責任だと文句をいう親たちが年々増えてきているからだ。だから、電気鉛筆削り器がどの教室にも備えられ、もちろん家庭にも同様のものが置いてあるので、子供たちは鉛筆1本削る機会を持たずに成長していく。

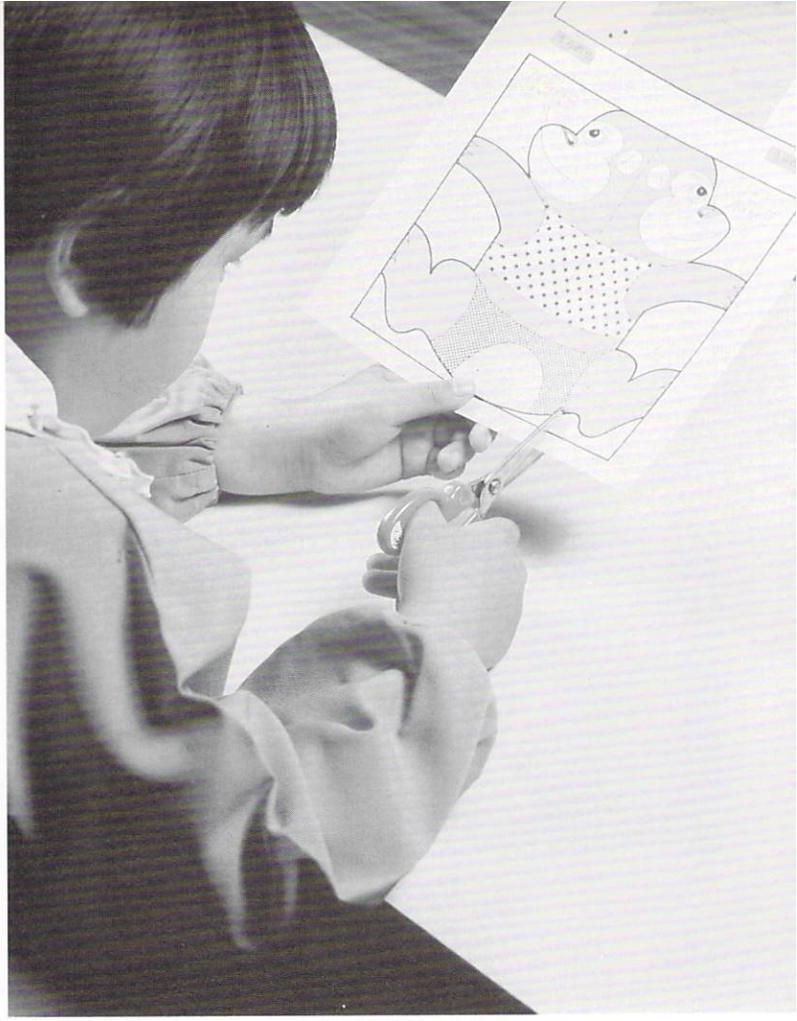
有名な肥後守や切出しナイフなどは、たしかに指を傷つけやすい刃物だが、それだけにかつては教師も親も、口を酸っぱくしてその扱い方に注意をしたものだったが、その刃物を子供たちから取り上げようとはしなかった。ときには指を切ってしまって、血が出ることがあっても、よく切れる刃物で切った傷口は癒りやすいし、少しはそういう痛い思いをしてでも危険な刃物を使いこなすようになる修練は、一人前のおとなになるたいせつな過程であったからだ。

幼稚園でも小学校でも、はさみを使う図工の時間はあっても、なるべく余り切れないはさみを使わせようとする。危ないから、切れない刃物で間に合わせて、ケガをさせないという〝親心〟なのかもしれないが、切れる刃物より切れない刃物のほうがよっぽど危険だということまでは思いつかない。

切れない刃物を使わされた子供たちは、物を切ることに伴なう快感を持つことができないから、刃物離れのしつけをしているに等しい。手の大きさに合うはさみであることは望ましいが、刃物でありながら切れにくいはさみであることは、少しもケガ防止に役立つことはない。よく切れない刃物を使うことにはデメリットばかりで、なんら良いことはないのである。

》手を動かせば大脳を発達する《

戦後育ちの教師も親も、きっと良質のはさみや刃物と無縁でおとなになってしまったのだろう。わが子が無事に育って欲しい、という願いは分からなくはないが、育ち盛りを刃物から遠ざけておけばケガをしないからよい、という考え方は愚かとしかいいようがない。できる限り、物を切るチャンスを与えないで青年、おとなになれば、身体は一人前に



なっても、本当の意味では成人とはいえない。

鉛筆は鉛筆削り器が削ってくれる、歯は電動歯ブラシで磨く、箸は使えずスプーンで食べる、骨付き魚はノドに骨が刺さるといけないから食べさせてもらえない、溺れるといけないから海や川で泳がせない、友人に手紙は書かず電話で間に合わす、試験問題はマークシート方式で文章を書く機会はきわめて少ない、ドアの前に立てば自動で開く、そういう環境で大きくなっていく子供たちは、いったいどんなおとなになるのだろう。

昔から日本人は手先が器用だ、といわれてきたが、幼いときから手を使うトレーニングを忘れた日本人の手が、これからも器用であるとは決していえないはずである。手先など不器用であっても、たくさん勉強して頭がよいほうが世の中に出て出世するから、さしつかえはない、という考え方が多くの親のわが子に対する期待らしいが、手を動かすことと大脳の発達が密接な関係をもつことは、とっくに証明されている。手を使うことが極端に少ない子供の頭脳の発達は、大変片寄ったものになってしまうだろう。

小学校には「図画工作」という教科があるが、実際には工作はほとんど忘れられていて、絵を描くばかりという学校が多い。絵を描くための準備は簡単だが、工作となればおそろしく手間がかかるのと、刃物を使わないではできないからだ。工作といえば粘土細工ぐらいだ。しかし、工作で何かを造るということは、ただ手を動かすばかりではなく、手と頭脳が連動していて、頭で考えたことを手先で実現する、という大切な訓練になるものなのだ。

物を切る、つなぎ合わせる、全体をバランスよく完成させるという行為は、いきなり巧みにできるものではなく、長期間の訓練を必要とするものである。

》子供たちの指をどう訓練するか《

手や指の訓練が大切だ、という考え方がすっかり衰えてしまい、そういう教育を施しておいて、「今の子供たちは、本当に不器用で困る」と嘆くのは大間違いではないか。手のトレーニングをさせてもらえない子供たちにとって、これほど残酷な批判を受けるのは腹の立つことだし、「今の子供は――」というおとなのほうに全面的に責任がある。

子供たちに必要なのは ファミコンよりも鋭い刃物

どれほど手や指の教育がおろそかにされているか、証拠を提示しよう。小中学生たちに向かって、5本の指の名称をいわせてみれば、全部いえる子供たちは非常に少ない。いうまでもなく、親指、人差指、中指、薬指、小指と呼ぶのが一般の呼び方であり、母指、示指、中指、環指、小指と呼ぶのは医学解剖学などの呼び方である。医学用の呼称まで知る必要はないだろうが、一般の呼び方くらいは、物心つくまでに教えるのは、箸の使い方とともに親の役目である。特殊な用語として人差指を食指、薬指を無名指、紅差指などと呼ぶこともあるくらいは、中学生ともなれば日本語の常識として知っているべきだ。

5指のうちでは、親指がもっとも大切な働きをするので動の指、他の4本の指を静の指という分け方もある。理容・美容師は、はさみを職業として使うが、親指を入れる環につながる刃を動刃、薬指を入れる環につらなる下方の刃を静刃と呼び、動刃を動かすことで髪を切るトレーニングが基本とされるが、指の運動としては合理的であるといえよう。ただし、理・美容師の卵たちにとって、静刃を文字どおり動かさず、親指だけを動かして動刃で毛を切るトレーニングに習熟することは、それほど容易ではないようだ。

X字型中間支点のはさみの場合、指環の形が同じ大きさのものが圧倒的に多いが、はさみを使い慣れない子供たちに、最初に与えるはさみは、親指を入れる環を小さく、他の4指を入れる環を大きく造ったものが使い易いから、この点を留意する必要があるだろう。乙女ばさみとはこの型のはさみであり、寄席の紙工芸に使うのもこの型、洋裁用の羅紗切りばさみも同じ考え方で造られている。日本型の羅紗切りばさみでは、そのうえ、刃を閉じた状態のとき、親指と4指のあいだに余裕を持たせるように工夫してあって、さらに使い易さを強調して造られている。

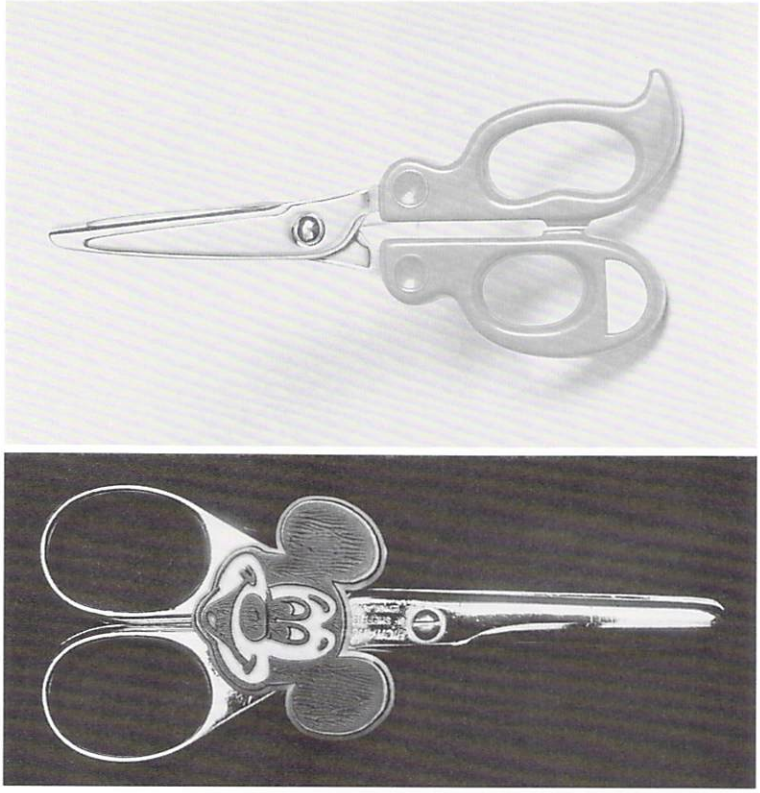
》イギリス製の小型のハサミ《

危ない、危ないの一点張りで、よく切れるはさみを子供たちには使わせないで、やむなくはさみを使わせるときは、切れ方が鈍いう

えに、刃を閉じたとき親指と他の1指がぴったり接近するように造られたはさみを指定して使わせる。幼児・子供には、親指の入る部分と、4指が入る部分とのグリップでできたはさみを与えるべきなのだ。私の持っているはさみの中に、イギリスで造られた小型のはさみがあり、鉄製で厚いクロームメッキが施され刃がついていない。そしてネジ部分にミッキーマウスが付いている。その使用目的は、幼児用にはさみの機能を覚えさせるための教材なのである。

U字支点の握りばさみ、X字型のその他の多くのはさみ、どちらも、はさみで物を切る道具だが、思うとおりに使いこなすためには、実は、かなりのトレーニングを必要とする。そうしたトレーニングの機会をほとんど持たなくても、はさみは使えないという道具ではないが、使い馴れた場合と、使い馴れない場合とでは、天地ほどの差がある。幼児に刃物を持たすのははやすぎるだろうが、物を切る道具についての認識を物心つく段階で与えようという考え方のイギリス方式は、大変興味深い。おとなになれば、座右に置いて一生使うことになるはさみの形を、玩具として、刃のついたはさみを使えるようになる以前に与えることは、すばらしい教育ではないだろうか。2度の世界大戦の戦場となって、経済の活力が乏しくなったからといって、われわれ日本人には、まだヨーロッパの文化に学ぶべきことはたくさんあるが、このような幼児用の〝切れない〟はさみなどを造って市場に出して行く思考方法なども、見すごしてしまっては大きな損失になりはしないだろうか。

次代を担うことになる子供たちの教育は、学校がする、というのは大きな錯覚だ。就学年齢に達するまでの教育は、前面的に親の責任であり、通学するようになっても、すべて教育は学校がやってくれるというのも大間違いだ。1人の社会人となるためには、学校の教育だけがすべてではないことは自明の理、家庭における教育がまずなければ、学校という集団教育を受ける資格を持つこともできるはずはない。



写真上・幼児専用のはさみは、それぞれに工夫がこらされている。五指がしっくりなじみ、軽くて小型のものが、最新の幼児用はさみ。(川嶋工業製)
写真下・ミッキーマウスのついたイギリス製のものも握りが手にしっくりとなじむように工夫されている。

》物を造る喜びを知らない子供たち《

幼児や小学生用としてのはさみも、幾つかの企業が考案し市場に出回っているようだ。それらのはさみのすべてを見たわけではないので、意見を述べることはできないが、幼児用・小学生用のはさみはかくあるべき、という合意のもとに造られたのではないように見える。また、実際に使用する幼稚園、小学校の側にも、まとまった具体的な考え方があるとも聞いていない。

現代人は、複雑な機能をもつさまざまの機械類にこそ興味を示すが、幼児・小学生がどんなはさみを使っているか、使うとすればどんなはさみが適当かなどという意見も余り出ていないし、PTAの議題にもならないのではないだろうか。子供たちの玩具といえば、ファミコンとか、ボタンを押せば電池を電源としてうごくものなどが大半を占めて、良質な積木とか、手造りを必要とするような玩具は、売れ行きが悪いのが実状だ。ボタンを押せばうごく、というだけの玩具を与えられて、上手にできようと、できまいと、物を造る喜びということを知らずに、就学すれば学校と学習塾で1日のスケジュールを使い果たす子供たちは、いかにも可哀想だ。

20歳をすぎた男女の青年たちに、握りばさみを使わせてみると、彼ら彼女らが成長期をどんな風に過ごしてきたか、だいたいの想像がつく。単純な構造の握りばさみであっても、刃のあいだに布切、紙をはさんでただ握りして2つの刃を合わせただけで切れるわけではない。2枚の刃のひねりに合わせた力の入れ方をしてうごかさなければ、どんな上等なはさみでも物は切れない。ほとんどそうした使い方をしたことのない青年たちは、体格だけはおとなを凌ぐほど育っていても、一人前の社会人として遇すべきかどうか、ふと、迷ってしまうのである。箸を扱うことができないままに成人に達してしまった青年に出会う戸惑いと似た気持ちにさせられるのである。どうも、日本人としてのしつけに欠けるのではないかと思わずにいられない。集団教育の場である学校で、箸の使い方や握りばさみの使用方法などまでは教え切れない。

》刃物追放運動の誤ち《

日本人は器用な国民だ、といわれてきたし、みずからそれをひとつの長所だと思ってきたが、どうやら、そう遠くない将来において、日本人は、かなり不器用な国民という国際的評価が定着するようになるのではないだろうか。ナイフ、はさみを使うのが不得手、鉛筆さえ削れない人間集団がおとなになって、たちまち器用人間に変身するということはあり得ない。1960年に始まった小学校の刃物追放運動が流した害毒は、無形のようではかり知れないほど大きい。刃物を扱うことによって自分や他人が傷つく可能性があるというのであれば、往来を歩いたり、乗物に乗ることは、もっと重大な危険を冒すことになるではないか。

人間は、刃物を身辺に置かずには生きられない。そうであるならば、その刃物を使えるように早いうちにトレーニングするとともに刃物を扱うマナーも覚えるべきだ。ナイフやはさみを手渡すときは、グリップを相手に向けて差出すべきだし、床や畳に置くことは禁物、はさみは落とすと調子が狂ってしまうし、ナイフ、はさみは使いおわった後、刃を拭いておくこと、などは幼いうちのしつけとして身につけておくのは当然のことだし、特別むずかしいことではないばかりでなく、自分も、他人も、刃物で傷つける危険を避けるために必要な最低条件ではないか。

幼少年時代に刃物になじんでおかなければ、もちろん切れなくなったナイフ、はさみを研ぐことなどできるようになる訳はない。切れなくなったナイフ、小刀は役に立たないし、野外活動に参加もできない。はさみを本格的に研ぐことはむずかしく、刃裏は裏スキをしてあるのを平らに研いでしまっては切れなくなるが、刃の表をちょっと砥石にかけるだけで、見違えるほど切れるようになる。そうしたことに一切縁がない生活とは、いったいどういう暮しということができようか。だが現実に、今の幼児・児童生徒たちの親や教師はナイフ類はさみ類とは余り縁が薄いままにおとなになった人たちが多い。せめて、自分たちに欠けた部分について、子供たちにはきちんとした教育、しつけをするべきだろう。